

インターネットコミュニティのコンテンツ 発信の変容について 試論

ー「2ちゃんねる」および「2ちゃんねるまとめサイト」の現状からー

櫻 庭 太 一

はじめに

近年、SNSの普及やタブレット端末、電子書籍端末市場の拡大によって、より多種多様かつ日常的な存在となったインターネットサービスのあり方は、これまで「ネットの特性を利用したニッチ市場の掘り起こし」に重点が置かれていたネットコミュニティと既存メディア、コンテンツ産業の関係を大きく変えつつある。筆者は拙論『Twitterを利用した小説作品の展開について—白石一文『翼』を中心に—』^(※1)をはじめとした幾つかの論考において、そうしたネットおよびコンテンツ状況の変容、特に既存メディアやその中で活動している専門作家の取り組みを中心に上げてきたが、本論ではそれらを踏まえ、インターネットコミュニティによるコンテンツ発信の史的展開を分析する試みの一環として、日本のインターネット上におけるコンテンツとユーザーコミュニティの相関性、特に「2ちゃんねる」とそのまとめサイトの史的展開について触れていく。1999年の登場からこれまで、日本のネットコミュニティの中で巨大かつ独特の存在感を見せてきた「2ちゃんねる」とその「まとめサイト」のあり方がどのように相関し、また役割を変えていったのかについての経緯をまとめていくことを目的としたい。

1. 「2ちゃんねる」の発展と概要

まず、本論で取り上げる「2ちゃんねる」およびそのまとめサイトの概要と位置づけについて触れる。

日本のインターネット、特にその文化やコミュニティ活動に触れる際、「2ちゃんねる」とそのユーザー（いわゆる「2ちゃんねらー」）の活動を無視することはできない。最盛期1000万人前後^(※2)とみられるユーザー規模はもち

ろん、それらユーザーによる書き込み（投稿）やコミュニティ内で制作されたアスキーアート（AA^{※3}）キャラクター、コピペ作品、Flash アニメーションなどは、「2ちゃんねる」発足当初の1999年から2000年頃にかけて日本のインターネット文化を代表するコンテンツとして認知され、多くの関連書籍^{（※4）}の出版をはじめ、サブカルチャー分野におけるムーブメントを形成した。

1999年5月に開設された「2ちゃんねる」は、当初先行する大手電子掲示板サイトの後継^{（※5）}的位置付の電子掲示板コミュニティとしてスタートし、そのユーザーやコンテンツ、用語を含めた「流儀」を吸収していった。ユーザー間のなれ合いの忌避や、独特のジャーゴン（これが後に「2ちゃんねる用語」として定着していくこととなる）を駆使したコミュニケーションは、初期の「2ちゃんねる」がネット黎明期の電子掲示板コミュニティ、それもいわゆる「アングラサイト」の影響を強く受けていた表われと言えよう。同時に、そうしたコミュニティの傾向は、「2ちゃんねる」の既存企業や大手マスコミなど“メジャー”に対する懐疑的、相対的姿勢として顕現することになる。例えば、「フジテレビの番組制作姿勢への疑問」^{（※6）}から始まったとされる2002年の「湘南ゴミ拾いOFF」や、玩具メーカーのタカラ^{（※7）}が「2ちゃんねる」で使用されていたAAキャラクター等を商標登録したことによる「ギコ猫騒動」と呼ばれるトラブルとそれに対するユーザーの盛り上がり（今日で言えば“炎上”にあたる）は、当時マイナーメディアと位置づけられていたインターネットの“代表”としての「2ちゃんねる」が、“^メ大手の^ジ企業・^メメディア”に反駁・対抗した（それがどこまで実効性を確保したかは別として）「痛快な物語」として多くのユーザーに消費されていったもの、と位置づけられる。書き込みやスレッド内の創作物はもちろん、そうしたコミュニティ活動の中で生まれた“武勇伝”のエピソードも含め、さまざまな種類のコンテンツを形成しながらコミュニケーションを取ることが、初期の「2ちゃんねる」に対するユーザーの愛着・一体感を増幅させる役割を果たしていたと言えよう。

一方で、「2ちゃんねる」全てが「外部」（主に出版、テレビ、ゲーム等ネット外のメディア産業）との対峙的姿勢のみで固まっていたわけではない。むしろ

る「2ちゃんねる」内ではそれら外部メディア製のコンテンツ・商品が広く愛好されており、発足当初からその二次創作やパロディ、あるいはジャーゴンの形で自分達のコミュニティの中に積極的に取り込んでいく姿勢が見られた。先述したAAキャラクターや長編ストーリースレッドの作成、Flashムービーによる動画、音楽の制作においても、外部コンテンツの二次創作やパロディは積極的に行われ、その一部は「2ちゃんねる」のカルチャーアイコン、あるいは定番の「ネタ」として定着していくこととなる。「2ちゃんねる」では、こうした「外部メディアに対する相対・対峙的な姿勢と、殺伐さを前面に押し出した空間」と、逆に「外部メディアのコンテンツを融和的に語り合う、あるいは積極的に利用してコミュニケーションを取ろうとする空間」としての両面性が、（おそらくはほとんどのユーザーもその切り替えについてはあまり意識しないまま）開設から今日に至るまで保持しされ続けてきたと言えよう。

2. 「2ちゃんねる」における“まとめサイト”の系譜

そして「2ちゃんねる」のユーザーと、そのコンテンツに対する需要が増大していく過程で、「2ちゃんねる」内の有用な情報や優れたコンテンツを外部のサイト、サービス上でまとめ、「2ちゃんねる」を常用するユーザー以外にも発信する（またそうしたコンテンツを求める）動きが出て来たのは当然の流れであったと言えよう。

この「まとめサイト」は、その名が示すように、「2ちゃんねる」の中に大量に存在するスレッドおよびその書き込みの中から、サイトの趣旨やユーザー需要に応じたものを選出して文字フォント・色の変更を行い、必要であれば外部サイトリンクなどを付加することで読みやすい形式にまとめたものを基本とする^(※8)が、筆者はここで、今日一般に「2ちゃんねるまとめサイト」と一括されるそれらコンテンツを、その起源および性質が異なる、大きく分けて2つの系統に分ける必要があると考える。

一つは「2ちゃんねる」発足当初から今日まで、いわば草の根的に制作され続けてきたもので、いわゆる「OFF」や「祭り」^(※9)の関連スレッドや、ネット上で話題になったコンテンツ、事件に関する情報等が当該スレッドの住人を

中心にまとめられたものを指す。基本的にそのスレッドとそこに集うユーザー（スレッド当事者、いわゆる“住人”）を読者対象とし、書き込みで挙げられた主要情報や外部リンクなどを整理し、読みやすく、また利用しやすい形で提供することを目的としていた。「2ちゃんねる」の初期、特に開設当初から2004年頃まで、「まとめサイト」と言う場合、基本的にこの形態のものを指すことが多い^(※10)。

もう一つは、現在「2ちゃんねる系ブログ」^(※11)あるいは「2ちゃんねる系ニュースブログ」と呼ばれるもので、話題になった出来事やニュース記事などを取り上げ、それに対する「2ちゃんねる」内の反応を抜粋、編集する形で外部のブログサービス等に掲載するのが主な形態となっている。

この形態の「まとめ」の多くは該当スレッドの“住人”による自発的、集団作業的なものではなく、基本的に第三者である個人あるいは企業によって制作されており、「2ちゃんねる」の書き込みをコピー、編集して自サイトのコンテンツとして利用することから、揶揄的・批判的な意味合いを込めて「コピペブログ」と呼称されることもある。現在、ネットコミュニティやそれに関連した報道等で「2ちゃんねるまとめ」と呼称する場合、この「2ちゃんねる系ニュースブログ」を指すことが多い。

本論では、以下、内容や系統が異なるこの二つの「2ちゃんねるまとめサイト」について、ユーザーの草の根的活動を源流とする前者を「従来型まとめサイト」、ニューストピックを中心とする後者を「ニュースブログ型まとめサイト」と呼び分け、次節以降その内容について詳述する（なお、「2ちゃんねるまとめサイト」の表記は両者を総合的に扱う場合、すなわち「2ちゃんねるの書き込みを情報源とした二次コンテンツを掲載するサイト全般」について言及する場合に用いる）。

3. 2ちゃんねるまとめのコンテンツ

こうした「2ちゃんねる」二次コンテンツのあり方について、柏原勤(2012^{※12})は、「2ちゃんねるに特有の文化的コンテクストを備えたUGC（user generated content）の一種」とした上で、「2ちゃんねる系ニュースプロ

グ」を「ニュース」という情報獲得的側面と「2ちゃんねるユーザーのニュースの読み解き」という娯楽的側面を持ち合わせた複合的な効用に対応しているニュース・メディア」と位置づけている。筆者もこの見解は妥当なものと考えているが、他方で、「2ちゃんねる」および「2ちゃんねるまとめサイト」の史的展開や内実などに踏み込む場合には、前節で述べたようにその内容の変遷についてより詳細に分けていく必要があると考えている。

前節で上げた、「従来型まとめサイト（以下“従来型”）」と「ニュースブログ型まとめサイト（以下“ニュースブログ型”）」の2つの形態において形成・発信されるコンテンツ構成は、概ね以下の通りである。

	従来型	ニュースブログ型	両者共通
主な内容	コピペ、AA、flash、スレッドの保存、“祭り”、イベントの告知、報告	コピペ、AAも含めたスレッド全体の流れ、ニュース報道や事件、事故に関連した2ちゃんの反応	怪談や体験談等の作品（書き込み）を集めたもの、ゲームの攻略やIT、軍事、歴史などトピックごとの情報など
備考	「2ちゃんねる」開設当初から存在。 殆どの場合、単独のスレッド、話題、イベントがまとめられる。	「2ちゃんねる」のブランド確立以降（概ね2004年以降）に隆盛。 複数のスレッドや話題、イベントがまとめられている	

上記の表で見られるとおり、特定の情報に関するティップスや、体験談・エピソードをまとめたコンテンツは従来型とニュースブログ型に共通して見られるもので、「まとめサイト」から発信される情報の主要部分を占めている（本論で取り上げる「電車男」や「風俗行ったら人生変わったwww」等もこの形態に属するが、形態ごとの共通点および相違点については後述する）。

一方、従来型は概ね単独のスレッドやイベントをまとめたもので、今日までさまざまな局面で制作され続けているが、特に「2ちゃんねる」初期においてはOFF活動やいわゆる「炎上」に類するものなど、ユーザー活動の当事者による同時進行の記録として利用されることが多かった。これに対してニュースブログ型では、複数の（それぞれのニュースブログ型まとめサイトごとに、中心的に取り扱う内容に違いがあるが）スレッドや話題、イベントが掲載されて

いることに加え、ユーザー活動の直接記録ではなく、該当の話題を取り上げたインターネットニュース等他媒体の情報を間接的にまとめるなどの、二次的・三次的な情報の取り上げが中心となっている点が特徴と言える。

4. 「従来型まとめサイト」と「ニュースブログ型まとめサイト」の例

次に、2014年4月末時点での主要な「従来型まとめサイト」および「ニュースブログ型まとめサイト」とされるサイト事例を以下に挙げる。(各URLおよびページのタイトルも2014年4月末時点のものである) また、元となるサイトの消失・運営元の変更等があったものについては、「2ちゃんねる」を出典としていることと、元サイトとの関連性が明確なもののみを挙げた^(※13)。その他、言及が必要なものについては別途注記を付けている。

まず、「従来型まとめサイト」に類するものとしては

- ・電車男 (<http://www.geocities.co.jp/Milkyway-Aquarius/7075/trainman.html>)
- ・AA大辞典(仮) (<http://cpsft2010.sitemix.jp/aadic/>)
- ・2典 (<http://freezone.kakiko.com/jiten/>) ^{※14}
- ・モララーのビデオ棚 (<http://kattehokannko.web.fc2.com/>)
- ・ムネオハウス (<http://www.muneo-house.net/>)

この他、「NAVER まとめ」(<http://matome.naver.jp/>)のサービス内に多数の「2ちゃんねる」スレッドの情報をまとめたものが存在するほか、「まとめサイト」をまとめたものや事件・トラブル等の「まとめ」も存在するが、上記では創作系およびまた2ちゃんねる開設から時系列的に近いものを中心に挙げた。

次に「ニュースブログ型まとめサイト」に類するものとしては、

- ・【2ch】ニュー速クオリティ (<http://news4vip.livedoor.biz/>)
- ・VIPPERな俺 (<http://blog.livedoor.jp/news23vip/>)

- ・哲学ニュース (<http://blog.livedoor.jp/nwknews/>)
- ・痛いニュース(ノ∀´) (<http://blog.livedoor.jp/dqnplus/>)
- ・【2ch】ぬこ速報 (http://blog.livedoor.jp/nuko_soku2ch/)

などが挙げられる。(現在は主要な情報源を自サイトコメント欄および「2ちゃんねる」外のサイト、SNS としているものも含む)

これらは数十～数百のスレッド「まとめ」を提供する大規模なものが中心で、「ニュースブログ型まとめサイト」相互でのリンクや他のまとめサイトの記事引用が行われることも多い。この形式は現在もっとも多く見られるもので、2ちゃんねるまとめサイトの一覧 (<http://dic.nicovideo.jp/a/2ch> まとめサイトの一覧^{※15}) によれば、同一覧に登録されているものだけでも、現在およそ 1500 を超えるサイトが「2ちゃんねるまとめ」として活動していると見られ、「2ちゃんねる」ユーザーを対象としたものだけではなく、ネット上の情報媒体として、様々な“読者”を対象とした多種多様な活動が行われている。

5. 「2ちゃんねるまとめ」サイトの機能変遷とその役割の変化

初期の「2ちゃんねる」と、前節で述べた「従来型まとめサイト」との相関性は、概ね以下のように総括できる。まず「2ちゃんねる」本体のスレッドにおいて活発な情報交換や投稿が行われる過程で、優れた技量・センスを持つ“職人”と呼ばれるユーザーによるコンテンツ制作が行われる。そのコンテンツがユーザー間で人気を獲得し、それに触発されたスレッド内の他ユーザーや第三者によって該当スレッド、あるいは職人による作品の「まとめ」が作られる。これにより一種の「内輪受け」の状態が形成されるわけだが、この形態による「まとめ」は、スレッド住人たちによる作品鑑賞・記録の場であると同時に、URL の転載や他のサイトで話題になることで、それまでそのスレッドあるいは2ちゃんねる自体にアクセスすることがなかったユーザーを呼び込むきっかけとなるほか、その「まとめサイト」をまとめたサイト（「まとめのまとめ」等と呼ばれる）からも、二次的、三次的に新たな観客、作品の作り手^{ギャラリー}を呼び込んでいく。このことが元のスレッドで活動する“職人”やユーザーのモ

チバージョン（スレッドの活性度）を増大させ、さらに多くのユーザーをスレッドに呼び込み、それがまた作品数の増加、優れた技量を持つ職人の参加を喚起して、「2ちゃんねる」発コンテンツの数と発信力を高めていく。

初期の「2ちゃんねる」で顕著だったAAキャラクターと付加設定の急速な拡大、またFlash板における映像・音楽作品制作とイベントの開催（すなわち「2ちゃんねる」コミュニティの活性化）は、こうした「2ちゃんねる」におけるコンテンツとその「作り手」と「^{ギャラリー}観客」のサイクルが機能することによってもたらされたものと言って良いだろう。

また、この時点での2ちゃんねるの「従来型まとめサイト」は、2004年の「電車男」^(※16)の事例でも明らかなように、通常のスレッド・アーカイブである以上に、一般ネットユーザーの興味を該当スレッド、さらには「2ちゃんねる」本体に呼び込む導線として機能した。つまりこの時期に「2ちゃんねる」が日本を代表するインターネットコミュニティとしての認知を受けた背景には、書籍、報道などの一般（外部）メディアでの取り上げと同等かそれ以上に、「まとめサイト」によるコンテンツ発信と新たなユーザーの取り込みに負うところが大きかったといえる。

一方で、おおむね2005年以降、その後を追う形で定着していった「ニュースブログ型まとめサイト」は、2ちゃんねる系のAAキャラクター、ジャーゴンを頻用しつつ、事後的に引用された「2ちゃんねる」のスレッドや他サイトのニュース記事を“ネタ”としてコミュニケーションをとる（あるいは読み物として読む、サイト内の掲示板に自分のコメントを書き込むなど）形態のサイトであり、「2ちゃんねる」のコンテンツや文化コードがすでに浸透・定着していることを前提とした存在と言えよう。

この「ニュースブログ型まとめサイト」のメディア的な役割が「従来型まとめサイト」と明確に異なるのは、「従来型」が持っていた「2ちゃんねる」コミュニティ活動の同時進行の記録、アーカイブとしての側面が相対的に弱く、特定の傾向と需要を持った「読者」を想定した上で、その読者に（「2ちゃんねる」を出典とした）情報をニーズに沿った形で提供するという、二次的な情報コンテンツの生成にサイトの重点が置かれている点である。すなわち、「従

来型まとめサイト」においては情報発信の主体は実際の「2ちゃんねる」ユーザー、特にそのコミュニティ活動の側に置かれるケースが多かったのに対し、「ニュースブログ型まとめサイト」の場合、発信の主体は記事の編集に携わる第三者（サイト運営者）と「2ちゃんねる」本体にはほとんどアクセスしないユーザーを多く含んだ“読者”の側にあるという点である。

そこでは（従来の「まとめサイト」と同様に）「2ちゃんねる」由来の情報・動向の提供が行われはするが、そこに「2ちゃんねる」コミュニティや当該スレッドとは直接的な関係を持たない第三者的な視点による編集や読者ニーズへの対応が介在することになる。それによって、スレッドの論調や雰囲気を判りやすく伝える、マイナーだが良質なスレッドの紹介を行う、あるいは外部サイトへのリンク付加等によって読者がスレッドについての付带的、予備的な情報を獲得しやすくなるといったメリットがある反面、読者（アクセス）や宣伝媒体としての価値（＝広告、アフィリエイト収入）の増大を目的とした恣意的な編集やスレッド情報の改ざん、事実誤認の発生といった問題点も指摘されている。

また、多くのニュースブログ型まとめサイトでは、掲載されたスレッドのまとめ記事にコメントを付ける機能を提供しているが、これは話題やスレッドへの感想を通じた（より多くの情報を提供できる）三次的な交流を行う場としての役割を果たすと同時に、「ニュースブログ型まとめサイト」が「2ちゃんねる」本体とは別個の、独立したコミュニティサイトとしての性質を強く帯びる要因ともなっている。

これは言い換えれば、恣意的な編集や改ざん、さらに捏造が可能（実際にそうした問題が起きている）なコミュニティとして機能しうることを示しており、そこに集まる“読者”が、「2ちゃんねる」本体の動向や論調、あるいは事実とは異なる情報の提供を受け、それを前提とした二次的、三次的な論調を「ニュースブログ型まとめサイト」の中で形成していくケースがあることを示している。結果として、時に「2ちゃんねる」本体、あるいはネット全体から見て必ずしもマジョリティとは言えない、あるいは情報として高く評価されているとは言えないコンテンツや論調が、大手の「ニュースブログ型まとめサイ

ト」を通じて一定の（時に大きな）プレゼンスを獲得するという問題を生む要因ともなった。こうした状況は、「ニュースブログ型まとめサイト」だけでなく多種多様な情報・コンテンツが流通し、（その実態はともかくとして）オルタナティブな価値観を提供するメディアとしての「2ちゃんねる」に対する多くのユーザーの認識、そしてそのコンテンツに対する“信頼感”に変化を及ぼしつつあるといえよう。

その一つが、「ニュースブログ型まとめサイト」に掲載される「「2ちゃんねる」の情報」の客観性が担保されない状況が常態化すること（そしてそのことが「2ちゃんねる」内外のユーザーにも認知されてくること）で、まとめサイトに掲載される情報・コンテンツ作品に対するユーザーの感想や批評としての語りが、結局は「ネタ」や「ステマ」として回収され無効化してしまうリスクが大きくなっている点である。同時に、「ニュースブログ型まとめサイト」における恣意的な編集が、より蓋然化された形で展開されるようになることで、（個々のまとめサイト自体への信頼性の低下はともかく）「2ちゃんねる」本体の存在感およびユーザーの参加モチベーションの低下をまねく事態が懸念されてくることになる。次節の「2ちゃんねる」運営陣による「転載禁止」措置その反響は、その表れと言える。

6. 現在の「2ちゃんねる」の状況と経緯

前節で述べた「ニュースブログ型まとめサイト」をめぐる問題に起因して、2012年6月には以前から運営および記事の制作手法を批判されていた一部の大手まとめサイトに対し、転載禁止の通告が行われている^(※17)。このトラブルを転機として、「ニュースブログ型まとめサイト」に対する「2ちゃんねる」内外からの批判はより一層高まっていくこととなった。さらに2014年2月、「2ちゃんねる」の運営陣（開設者である西村博之ではなく、同サイトのサーバ管理者であり外郭サイト「PINK ちゃんねる」の運営者である Jim Watkins を代表とする）から、運営体制の刷新を通告する書き込みがなされ^(※18)、並行して多くの板・スレッドにおいてユーザー投票による転載禁止のルールが定められた^(※19)。これによって、ほとんどの「ニュースブログ型まとめサイト」

で「2ちゃんねる」のスレッドを出典とする記事の掲載が不可能となり、「ニュースブログ型まとめサイト」の情報源がtwitterなどの他のウェブサービスや転載自由を謳った総合型掲示板サイト「おーぷん2ちゃんねる」(<http://open2ch.net/menu/>)などに分散する状況となっている。さらに同年4月1日には「2ちゃんねる」の開設者である西村博之が「昨今の2ちゃんねるの現状に関して。」^(※20)とするコメントを発表、Jim Watkinsをはじめとする現運営陣および協力しているスタッフを批判した上で、新たな「2ちゃんねる」を<http://2ch.sc/>のドメイン上に開設することを宣言（その後、同年4月11日に開設）するなど、「2ちゃんねる」そのものが2つに“分立”する事態へと進展した。（以上の状況は、2014年4月末時点のものである）

本来二次・三次コンテンツである「ニュースブログ型まとめサイト」の問題から、「2ちゃんねる」本体の在り方そのものが問われる大きな“ゆらぎ”が生じた状況と言えるが、このケースで特徴的だったのは、「2ちゃんねる」各スレッドのユーザーによって“まとめサイトへの転載禁止”が票決された際、多くのニュースブログ型まとめサイトがほとんど間を置かず、他の掲示板サイトやtwitterなどに情報源を乗り換える動きに出たこと、またそれに合わせて、「2ちゃんねる」本体のユーザーが他サイトに移行する動きが見られたものの発散的なものに留まり、その後「2ちゃんねる」本体、「ニュースブログ型まとめサイト」ともに、何らかの歩み寄りや事態打開のための対話といった動きが見られなかったことである。

すなわち、「2ちゃんねる」本体の多くのユーザーにとって、「ニュースブログ型まとめサイト」の活動に（スレッドの転載等の形で）関与しようとするモチベーションは殆どみられず、また「ニュースブログ型まとめサイト」の側にとっても、他のサイト・サービスによる「2ちゃんねる」の代替が可能という、相互の相対化、活動のパラレル化が顕著に見られた事態であると言って良いだろう。

7. 「転載禁止」騒動にみる「2ちゃんねる」文化の背景化

こうした「2ちゃんねる」と「まとめサイト」の“相対化”傾向は、「2ちゃ

んねる発の小説」として2004年に話題になった『電車男』と、同じく2011年の『風俗行ったら人生変わったwww』^(※21)のメディア展開の対比からもうかがうことができる。同作は「童貞」で「コミュ障」の主人公^(※22)が、SNSで知り合った友人の助けを借りながら、ヒロインであるデリヘル嬢の「かよさん」と相思相愛になるまでのプロセスを描いたものであり、経済的、対人的なコンプレックスを抱えた男性が、恋人の女性（≡性体験）を獲得することでその状況を打開し「幸せ」を獲得する展開、また「この作品の読者もそうした体験をする可能性があるのだ」というメッセージ（いわゆる“非リア充”の救済と自己実現）を打ち出している点において、2004年の「電車男」と極めて類似した物語構造を持つ^(※23)。

しかし、「電車男」が神秘的かつ理想的なヒロインであるエルメスとの恋愛を、「2ちゃんねる」ユーザーの直接的な支援・対話を通じて成就させていく構造を持った物語であったのに対し、本作は、極めて受動的な性格かつ深刻なトラブル（それにより風俗業での仕事を続けざるを得ない状況）を抱えたヒロイン・かよの救済に焦点が当てられ、主人公が自身とかよとの恋愛・性体験、手助けしてくれた友人の優秀さを絡めて読者（「2ちゃんねる」ユーザー）に一方的に語る「武勇伝」としての要素が強いものとなっている。結果として、同作では「2ちゃんねる」そのものが物語展開に絡む要素が極めて薄く、基本的に物語の進行（書き込み）を促す役割しか持っていない。

また、同作における「2ちゃんねる」コミュニティ色の後退を最も端的に示すものとしては、書籍版の「あとがき」において主人公（＝著者）が、（本作のネット内における人気は）「ツイッターで火がついたんだと思う」と、物語の舞台・背景としての「2ちゃんねる」を相対化する言及をしている点にある。メディア展開にあたり、『電車男』がAAや用語も含めた「2ちゃんねる」本体との関連性を強く打ち出し、外部への発信も該当スレッドのユーザー（あるいは“体験者”である著者本人）による直接的なまとめサイトによって行われたのに対して、本作では「ニュースブログ型まとめサイト」によって「まとめ」が発信され、その情報も先述したようにtwitter等外部SNSのコミュニティ網を中心に拡散された点など、近年のネット状況を反映した「2ちゃんね

る」色の後退が進んでいる。

こうした両作の物語上、メディア、宣伝展開上の相違は、「2ちゃんねる」の置かれている状況がすでに2011年の時点で「電車男」の時代と大きくその様相を変えていること、特にtwitterなど他のSNSやコミュニティサービスの伸張によって、「2ちゃんねる」のコンテンツ・情報発信の拠点としての比重が相対的に低下していることの反映であり、そして多くのユーザーにとって「ニュースブログ型まとめサイト」は「2ちゃんねる」本体への導線ではなく、単独の情報収集・発信サイトとして認知されていることをうかがわせる。

●小括および今後の研究方針

本論において述べてきたように、「2ちゃんねる」「まとめサイト」は、「2ちゃんねる」の成長段階に応じて、その中心となる形態を変容させながら今日まで続いてきたと言える。

「従来型まとめサイト」は、特にその初期においてAAやFlashムービーなど「2ちゃんねる」独自のコンテンツの発信、またコミュニティ活動の同時進行の記録を、「2ちゃんねる」内外のユーザーに向けて発信する役割を担った。この時期における「まとめサイト」は、「2ちゃんねる」という掲示板サイトの“まとめ”であると同時に、初期のネットユーザーとその活動の体現としての意味合いを持っていた。まだネットコミュニティとそこから生み出されるコンテンツの形、そして可能性が定かでなかった1990年代末～2000年代初頭の日本のインターネットにおいて、「2ちゃんねる」が様々なAAキャラクターやFlash作品、また「まとめサイト」の形成を通じてその独自性とコンテンツの豊富さ（併せてコミュニティとしての可能性）を発信し続けたことは、日本におけるネットコミュニティとその活動の認知に大きく貢献したと言える。裏を返せば、自分たちのコンテンツを発信するための「足場作り」の段階からユーザー自身が積極的に動いていかなければならなかったのが2000年代初頭までの日本のインターネットの実情であり、「2ちゃんねる」そして「従来型まとめサイト」のユーザーの活動は、ユーザー自身が「インターネットを楽しむ」ための必然的な活動でもあった。

一方、「ニュースブログ型まとめサイト」は、日本の「ネット文化」が拡大していく中で形成された「2ちゃんねる」のブランド力（ネット内におけるコンテンツおよび「世論」形成の代表的な場としての）を受ける形で生まれて来た二次的、三次的コンテンツと位置づけられるが、やがて「2ちゃんねる」そのものの情報・コンテンツを発信したりユーザー導線として機能するのではなく、「2ちゃんねる」内およびネット内外の話題を、まとめサイトそれぞれのフィルターを通した別のコンテンツとしてユーザーに提供するための二次的、周縁的な空間としての性質を強めていった。

結果として、「ニュースブログ型まとめサイト」はゼロ年代後半、すなわち2005年以降の日本のインターネット上における情報発信、交流空間として大きな存在感を発揮する一方で、サイトの内容とそこに集うユーザー属性の両面で「2ちゃんねる」コミュニティとの結びつきが弱まっていき、「2ちゃんねる」の名こそ冠しているものの、役割としては独自のコミュニティサイトとしてむしろ情報・コンテンツ発信空間としての「2ちゃんねる」を相対化していく結果となった。

特に「ニュースブログ型まとめサイト」の伸張以降にインターネットを利用するようになった、あるいは本格的に利用し始めた世代のユーザーにとって、インターネットコミュニティやそのサービスとは「従来型まとめサイト」初期のユーザーが体験したように“コンテンツ発信の足場作り”から関わらねばならない未整備の空間ではなく、多くのサービスやコミュニティから自分が利用したいものを選択的に利用・参加できる環境が整った空間であったため、「2ちゃんねる」をはじめ特定のコミュニティを特別な存在、空間として扱わなければならない理由がそもそも乏しかった。その意味で、特に10代～20代のインターネットユーザーの多くに「2ちゃんねる」的文化やコミュニティを意識する機会が少なくなるのは当然と言えよう。また、2010年前後から本格化したスマートフォンやタブレット端末の普及と、LINEに代表されるアプリ提供を前提としたコミュニケーションサービスの拡大は、インターネット上のサイトやコミュニティの差異やその特質についての知識や経験があまりないユーザーも参加可能な（あるいは最初からそうした層を対象としたものとして運営

される) サービス、コミュニティを多く誕生させた。

これは単なる「ネット・リテラシ」の低下という以上に、多くのユーザーにとって、ネットコミュニティとは「自分たちが当事者となって、内部ルールやコンテンツを一から作り上げる」ものではなく、「すでに数多くの企業、団体によって提供されているものの中から（それも複数に）参加し、局面とコミュニケーションを取りたい相手に応じて使い分ける」ものへと変化していることの現れと言えよう（特にスマートフォンのユーザーにとっては、ほとんどのSNSおよびウェブサービスがアプリケーション・アイコンとして可視化され、その使い分け、棲み分けがより容易かつ“当然”のものとして提示されることが、こうしたネットコミュニティ観の変化を後押ししていると考えられる）。

そうした「2ちゃんねる」まとめサイトのあり方が、奇しくも「転載禁止」という2ちゃんねるコンテンツの外部発信をめぐる動きから、大きく変わりつつある。さまざまなコンテンツを生み出す空間、またコンテンツの形成空間という点で言えば、すでにその中心は「2ちゃんねる」単体ではなく「ニコニコ動画」やSNS等他のコミュニティサイトによって複合的に担われていると見て良いだろう。そして「2ちゃんねる」は、Webコンテンツと既存メディア業界連携の手法が確立し、他のコミュニティ、サービスが充実してきた中で、むしろその文化やコミュニケーション・ルールの独自性（「2ちゃんねる」らしさ、と言い換えても良い）が返って敬遠されることで、他のメディアやコンテンツとの連携が難しくなる局面も出て来ている。

2014年2月の「転載禁止」方針の決定に伴う騒動の中で、多くの「ニュースブログサイト」が見せた対応に示されるように、現在の日本のネット文化における「2ちゃんねる」本体の位置づけは、「情報・コンテンツ生成に関して大きな存在感を示してはいるが、代替が効かないわけではない情報源」に変化してきている。従って、前節で述べたように、今回のケースにおける多くの「ニュースブログ型まとめサイト」の対応は「次の情報源をどうするか」に集約され、ユーザー間において「2ちゃんねる」コンテンツ発信のあり方を問う動きはほとんど見られなかった。そもそもこの騒動のきっかけとなった「転載禁止」という決定そのものが、「2ちゃんねる」がコンテンツ発信に関するモ

チバージョンを低下させていること、また多くの「ニュースブログ型まとめサイト」との“距離”が極めて遠いことを示している。

こうした状況の変化には、「2ちゃんねる」全盛期の2000年前後に10代後半～20代であった、ネットコンテンツ消費の中心世代が概ね20代後半から30代を迎え、多くのユーザーが時間の制約、趣味嗜好の遷移からかつてほど積極的にネットコミュニティ（あるいは「2ちゃんねる」そのものに）関わらなくなってきていることも大きく関係していよう。後発のサービス（「ニコニコ動画」や他のSNS等）が増えてくるに従い、この傾向はより強くなっていくものと思われる。

無論、「2ちゃんねる」が日本のインターネット文化に大きな足跡を残し、また今日に至る影響を与えたことは論を待たない。しかしながら、2014年に起きた一連の“騒動”、またそれに対するユーザーの動きの経緯からうかがえる「2ちゃんねる」の在り方の変化は、すでに「2ちゃんねる」がネット上における情報・コンテンツの生成場所として、またその批評・交流空間としてはワン・オブ・ゼムとしての存在であることを物語るものと言えよう。

今後、元来の「2ちゃんねる」（2ch.net ドメインのもの）と他の互換サイト、また新「2ちゃんねる」（2ch.sc）のどちらが「2ちゃんねる」コミュニティの“本流”として認知されるのかは不透明であるが、いずれにせよ「2ちゃんねる」文化の周縁化と、ネットコミュニティ活動の他サイト・サービスへの分散はほぼ定着した流れであると言える。そのため、今後の「2ちゃんねる」は、開設当初のようにネットコミュニティ活動とその文化の中心地的役割を担う場としてではなく、ある程度の影響力を保持したまま、ネット内の一コンテンツである「（非商用）ニュースブログサイトの転載元」として、また「2ちゃんねる文化」になじんだ、あるいはそれを懐かしむ比較的高い年齢層（30代～40代）のユーザーが集う場所として機能していくものと思われる。こうした流れは、当然ながら「2ちゃんねる」本体そのものの影響力の変化であると同時に、日本のインターネットコミュニティにおける「2ちゃんねる」本体と、その周縁的活動であった「ニュースブログ型まとめサイト」との力関係の変化を如実に顕すものと言って良いだろう。また、かつての「2ちゃんねる」

文化の全盛期以降にインターネットに触れた世代や、SNSをはじめ新たに登場したサービスによって初めてネットのコミュニティ活動に触れたユーザーたちによる「2ちゃんねる」以外のコンテンツ、流儀との合流が今後加速していくことで、日本のネットコミュニティとその文化における「2ちゃんねる」の相対化と内部の変容はより進んでいくものと考えられる。今後は、それら新しい世代によるネットコミュニティの活動および「2ちゃんねる」との関連性について、日本のサブカルチャー文化におけるネットコミュニティの位置づけと史的展開を探る視点から、研究を進めていきたい。

- ※1 専修大学情報科学研究所『情報科学研究』No.34（2013年）
- ※2 公益社団法人 日本アドバタイザーズ協会 Web 広告研究会 2008年4月の『消費者メディア市場規模調査』より。なお、この調査では2006年12月の10,315（千）人から、2007年9月には8,681（千）人と漸減している。
- ※3 プレーンテキストによってブラウザ上に絵や図形、ロゴ等を表現する技法。広義には「顔文字」を含む。本来は欧米圏における ASCII 文字コードによる表現（ASCII-Art）を指したが、シフト JIS コードを主流とする日本においても「アスキーアート」の呼称が定着している。
- ※4 開設直後から散発的にメディアに取り上げられてはいたが、公式情報およびその文化についてまとめた最初期のものとして、2002年に刊行された「2ちゃんねる公式ガイドブック 2002」（コアマガジン）がある。
- ※5 『あめぞう』。具体的には、同サイトの機能不全に伴うユーザーの避難場所として開設された。
- ※6 <http://dic.nicovideo.jp/a/2ch> 湘南ゴミ拾いオフ などによる。
- ※7 現・株式会社タカラトミー
- ※8 同様の形式による「まとめ」は、「2ちゃんねる」を情報源としたもの以外にも多数存在する。
- ※9 「OFF」はスレッドの投稿者同士がネット外で集まりイベントや会合を行うこと（いわゆる“オフ会”）を差し、「祭り」はなんらかの出来事

(トラブルが主)をきっかけとしてその対象となる人物や企業、サイトなどに対する書き込みが殺到する状態を指す(今日でいう“ネット炎上”に近い性質を持っている)。

- ※ 10 ただし、一部では業者や商用サイト等によってマーケティング目的、あるいはサイトアクセス数を稼ぐ目的で作成された「まとめ」も存在した。
- ※ 11 例えば、Wikipedia の項目はこの名称で立てられている。(http://ja.wikipedia.org/wiki/2ちゃんねる系ブログ)
- ※ 12 「2ちゃんねるスレッドまとめブログ」によるニュース・コミュニケーションに関する一考察(慶應義塾大学『哲学』第128集、2012年)
- ※ 13 特に2000年前後に作られた「従来型まとめサイト」は、今日ホームページ開設サービス上が減少していることもあり、残存しているものが少ない。
- ※ 14 現在は閉鎖、有限会社ライトクローズによる後継サイト「2典 Plus」(http://media-k.co.jp/jiten/)に移行
- ※ 15 2012年7月10日、「2ちゃんねる」トップページ上に「ニュースブログ型まとめサイト」に向けて営利目的の場合は必ず、非営利の場合は任意でニコニコ大百科(http://dic.nicovideo.jp/)内に所定の項目について記載したサイト名の単語記事を作成することが呼びかけられた。
- ※ 16 2004年3月に元となるスレッド「男達が後ろから撃たれるスレ」が「2ちゃんねる」のカップル板に作成され、同年10月には書籍化。翌2005年には映画化、ドラマ化されるなどネット内外で大きな人気を獲得した。
- ※ 17 「2ちゃんねる」トップページ上(http://www.2ch.net/warn.txt)に掲載され、「第3者に迷惑をかけ謝罪しない人物に2chの著作物を使われることは、不利益が大きいため、下記のURLにおける2chの著作物の利用を禁止します。」という文面と共に該当まとめサイトのURLが列挙された。現在は削除されている。
- ※ 18 http://www.itmedia.co.jp/news/articles/1402/19/news151.html 現在、

もとの書き込みは消失しているため、「ITMedia」サイトの報道記事による引用とした。

- ※ 19 その後、3月21日に「2ちゃんねる」トップページに「無断複写●転載を禁じます」という文言が記載されたことで、全ての板が無断転載禁止状態になったと解釈される
- ※ 20 <http://2ch.sc/www2chscindex.html>
- ※ 21 遼太郎・著（小学館 2012年）
- ※ 22 こうした人物造形は「2ちゃんねる」における体験実録ものスレッドにおいて頻出する設定であり、その点において特異性があるわけではない。
- ※ 23 その内容および経緯については拙論「ソーシャルメディアの普及とテキスト作品制作・流通の変化についての分析」（2013年）にて述べているため、ここでは概要のみに留める。

<参考文献>

「2ちゃんねるのコミュニケーションに関する考察」平井智尚、慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要、2007年

「「2ちゃんねるスレッドまとめブログ」によるニュース・コミュニケーションに関する一考察」柏原勤、慶應義塾大学『哲学』第128集、2012年

「ネットの日本語—2ちゃんねるとニコニコ動画を中心に」内山弘、鹿児島大学『地域政策科学研究』、2010年

「ネットの日本語—2ちゃんねるとニコニコ動画を中心に」内山弘、鹿児島大学『地域政策科学研究』、2010年

「iSed 情報社会の倫理と設計 [倫理篇]」東浩紀・濱野智史 編、河出書房新社、2010年

「2ちゃんねる公式ガイド」2ちゃんねる監修、コアマガジン、2002年